

鎌倉の武家文化と守護神たち

「舍利殿、なんと素晴らしい建築様式だろうか」、数年前に禅刹円覚寺を訪れたとき、禅宗様の美しさと気品に満ちた姿に心を打たれた。そして舍利殿との出会いに、私は思わぬ興奮を覚えた。和様に比べ建物を構成する要素が小さく、より洗練された建築様式で、“火灯窓”、“棧唐戸”、“木鼻”などが禅宗様の特徴である。以来、私は鎌倉を度々訪れるようになり、かつての武家の都の歴史と文化を再発見するに至った。

12世紀末、平家が滅亡すると、1192年に源頼朝は征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉に最初の武家政権を創設した。その後150年に渡り、鎌倉は日本の政治・文化の中心になった。特に多くの新しい仏教宗派が現れ、武家の精神と神道・仏教が結びついた時代であった。この鎌倉時代の武士の精神、生活様式、宗教観などが、今日の日本人の生活に大きな影響をもたらし、建築、庭園、茶道、水墨画、伝統工芸などの日本文化に与えた影響は計り知れない。

本日は、鎌倉にある二つの壮麗な神社と二つの威厳に満ちた寺院を、年代を追って紹介し、その当時の武士の精神性および宗教観について述べたい。何故、源氏や執権北条氏は、これらの寺社を鎌倉の都に建立したのか。また当時の宗教的、政治的な背景はどのようなものであったのか。というのも日本の文化は異なる複数の宗教的要素の基に成り立っており、日本の宗教の特徴であるシンクレティズム（諸教混淆）を知ることは、今日の私たちの文化を理解する上で欠かせないからである。

まず始めに荏柄天神社を紹介したい。1104年に創建されたこの神社は、菅原道真公（平安時代に活躍した右大臣で卓越した文人官僚）を御祭神として祀ったのが始まりと伝えられている。1180年、源頼朝は荏柄天神を鬼門（鬼門の信仰は古代中国の民間信仰である道教が起源される）の守護神と仰ぎ、改めて社殿を造立した。以来鎌倉幕府は、荏柄天神社を武家の都の守り神として、また詩歌など文芸の神様として信仰した。今日でも、福岡の大宰府天満宮、京都の北野天満宮と共に三天神社として知られ、多くの人たちが参拝している。

次に鶴岡八幡宮を紹介する。1063年、奥州を平定（前九年の役）した源頼義が鎌倉の地に創建し、1180年に源頼朝が街の中心地に社殿を遷した。始まりは、武神として名高い応神天皇に縁のある八幡宮を、源頼義が京都の岩清水八幡

宮から鎌倉に勧請したとされる。以来源氏の氏神である八幡神は、鎌倉武士の守護神となった。また源頼朝は八幡宮を造立することで、京都の朝廷や貴族、そして地方の御家人に対し武家政権の最高権威と絶対権力を正当化しようとしたと考えられている。以来鶴岡八幡宮は、武家政権の政治的、また軍事的中心として役割を担うこととなった。

次に紹介するのは高德院（江戸時代に宗派を浄土宗に改める）である。像高 11.3メートルの銅造の阿弥陀如来坐像が有名で、1252年、鎌倉幕府の主導で鎮護国家の祈願と幕府の権威を象徴するため造立された。瞑想する佇まいの阿弥陀如来坐像は、かつては全身が金箔に覆われ、大仏殿に安置されていた。しかし相次ぐ台風、地震、津波などの天災により建物は完全に倒壊したため、以来屋外に鎮座され、「露座の大仏」として知られている。また1958年には国宝に指定され、大仏は常に鎌倉の街を見守っている。

次に紹介する寺院は、臨済宗円覚寺である。1282年、第8代執権北条時宗公と中国から招かれた無学祖元により、二度に渡る蒙古襲来（1274年、1281年）で殉じた両軍の兵士を慰霊するために創建立された。円覚寺は、室町時代に鎌倉五山第二位に列せられた、鎌倉でもっとも重要な禅刹であり、禅宗の教えは特に鎌倉幕府の武士たちの間で広まっていった。武士たちは、その教えの中に、簡素で、厳しく、男性的な規律を見出し、旧仏教（奈良の南都六宗、真言宗、天台宗）の教えよりも、この禅宗により魅かれていったのである。

御本尊は他の鎌倉の主要な禅寺と同様に（除く建長寺）釈迦如来で、宝冠を戴いた釈迦如来坐像の脇侍として、古代のインド神を起源とする梵天像と帝釈天像が安置されている。特に円覚寺は、素晴らしい禅宗様の舍利殿（国宝）が有名であり、3代将軍源実朝が中国から持ち帰らせたお釈迦様の歯が安置されていると伝えられる。

上述の通り、鎌倉に於けるこれらの寺社の建立目的やその守り神たちは、その時代の社会的要求に応えるため、時代と共に変化してきたと考えられる。

鎌倉幕府を創設する前、まず源頼朝は荏柄天神社を鎌倉の鬼門を守る守護神とするために社殿を造立する。外敵や邪気を追い払い、鎌倉の地を守るためであった。次に幕府が創設されると、頼朝は武家政権の軍事的、政治的権威を確実にさせるため、鶴岡八幡宮を鎌倉の中心に遷した。そして政権が安定期に入ると、鎌倉幕府は鎮護国家のため大仏（阿弥陀如来坐像）を造立する。云わば大仏の建造目的は、鎌倉の地を超えて国家観の広がりを見せ始める。そして鎌倉時代の中期以降、宋や元から大量に中国文化が流入し、また二度に渡る蒙古襲来に直面した幕府は、国際的な視野を持ち始める。時の執権北条氏は、彼らの心の拠り所として、中国から伝わった禅宗により訴えるようになった。鎌倉時代の後半は、正に日本文化と中国文化の融合が加速度的に進み、日本文化の獨創性が現れ始めた非常に重要な時代であった。

最後に、ご存知の通り「武家の古都」鎌倉はユネスコの世界文化遺産登録に推薦された。私は、日本人としてより多くの人たちが鎌倉を訪れ、古都の文化の価値や豊かさを再認識して頂きたいと願ってやまない。また同時に、鎌倉にある全ての歴史的建造物、伝統、文化などが保たれ、世代を超えて受け継がれていくことを強く望んでいる。

平成 24 年 10 月

北村 公和